

広東語話者による二字漢語の誤答の分析  
—促音、濁音、半濁音に注目して—

An error analysis of two-character Sino-Japanese words  
by Cantonese speakers: Focusing on sokuon, dakuon and han-dakuon

郡司 拓也  
嶺南大学

要旨

漢字圏学習者を対象とした漢字教育に関する研究は今日に至るまであまり多いとは言えない。実際の教育現場でも日本の漢字と学習者が母語で使用している漢字の標準字形の違いについて触れる程度であるというところは少なくないように思われる。

本研究では漢字圏学習者である広東語母語話者がすでに持つ知識を日本語の漢字語彙の習得に活用するための基礎調査の一つとして、二字の字音語（二字漢語）の読みの誤りを分析した。促音、濁音、半濁音に関する誤答に注目したところ、促音と濁音、特に濁音では本来音変化しないものまで過剰般化させる誤りが多いということが明らかとなった。

キーワード:

広東語話者、二字漢語、音変化、誤答分析、過剰般化

# 広東語話者による二字漢語の誤答の分析 —促音、濁音、半濁音に注目して—

郡司 拓也  
嶺南大学

## 1. はじめに

日本語の漢字学習は非漢字圏学習者だけでなく、漢字圏学習者にとっても容易ではないという指摘はしばしばなされている。例えば、伊藤（1989）は「漢字圏学習者ですら閉口している点は、次の二つに要約できる。日本語の漢字の読みの複雑さと、送り仮名の煩わしさである。」と指摘している。そして前者に関し、字音語の音変化について、「字音語の音変化の型といったものを学習者に提示できれば、その読みを類推する手掛かりになるのではないか」とし、二字で構成される字音語（以下、「二字漢語」と表記）の音変化の法則について紹介している。

こうした字音語の音変化の法則はすでに数多く紹介されており、阿久津（1991）のように漢字圏日本語学習者に対する教育を想定したものも見られる。

確かにこういった字音語の音変化の法則がわかれば、学習者の助けになるかもしれない。中でも漢字の知識のある漢字圏学習者、特に入声の区別のある広東語話者にとっては促音化や半濁音化の区別の際に母語からの正の転移が期待できる可能性はあるだろう。しかし濁音化など例外が見られるものも少なくないため、ただそのまま法則を提示してもそれだけで効率的な語彙習得に繋がるかどうかには疑問が残る。法則を提示する前に実際に学習者が字音語の音変化を本当に苦手としているのか、苦手としているのであれば、その誤りに何らかの傾向が見られるのかという点を把握することで、より効果的な文字、語彙教育に繋がるのではないかと考えたのが本研究の出発点である。

## 2. 先行研究

漢字の読みに関する誤答分析は濱田・高島（2009）のように中国人学習者を対象としたものを中心として、これまでも先行研究は少なくない。また兒島（1998）のように香港の広東語話者を対象とした研究もある。濱田・高島（2009）も兒島（1998）も比率は異なるものの、ともに音韻に関しては長短音の誤り、清濁音の誤り、子音の誤り（交替・添加・脱落など）が誤りの要因の上位3位であると分析している。

こうした研究により、漢字の読みの誤りは学習者が音声面で苦手としているものと共通する点が見られることが明らかにされている。

しかしこれまでの漢字の読みに関する誤答分析は広く字音、字訓を含めて出題し、音韻面での誤りや字音、字訓の混同など他の読みとの誤りに注目、分析しているものが多く、二字漢語特有の音変化に注目している研究は少ないようである。そのような中で、黒沢（2013）は二字漢語の前接字末音が入声音であるものに注目し、漢字圏、非漢字圏学習者を含むN2レベルの学習者に対し、促音化、非促音化の区別がどの程度できるのかという調査とその誤答分析（30語、選択式）を行い、誤答は母語を問わず、二字漢語の2字目（後接字）ではなく、1字目（前接字）に集中していたと述べている。しかし、この研究は促音化とそれに伴う半濁音化に限定したもので、濁音化や前接字末音が入声音ではない半濁音化であるものに関しては対象外であり、二字漢語の促音化、濁音化、半濁音化に関する誤答分析を行っている研究は少なくとも広東語話者を対象としたものではこれまで行われていないようである。

### 3. 研究の目的と方法

本研究は広東語話者による日本語の二字漢語の習得過程において見られる字音語の音変化に関する誤答を分析し、音変化を含むかどうかで誤答率に差が見られるのか、また促音化、濁音化（連濁）、半濁音化のそれぞれの誤答を比較し、学習者の誤りの傾向を明らかにすることを目的とする。調査の手順は以下のとおりである。

#### 3.1 調査対象と調査の手順

被験者はマカオ大学で日本語を専攻している広東語話者の4年生39名である。被験者には事前に出題される二字漢語の一覧表を配布し、事前学習を促した上で、毎回授業の最初の5分間を使い、二字漢語の文字・語彙の小テストとして解答してもらった。

#### 3.2 再生テストの内容

小テストとして実施した再生テストの出題語彙は『日本語能力試験出題基準【改訂版】』に掲載されている語彙リストから旧日本語能力試験の1級相当の語彙とされているものを抽出し、その中から二字漢語577語を調査対象とすることとした。その577語を原則として週2回の授業の際に毎回30語ずつ出題した。出題方法は問題用紙に書かれている二字漢語を読み、その発音をひらがなで回答するというもので、極少数ながら見られたひらがなの字形の誤りによる誤答は今回の調査対象外とした。なお本研究では二字漢語の音変化に注目をしているので、二字漢語の前接字末尾音と後接字頭音以外の誤りに関しては誤答として扱わない。

広東語話者による二字漢語の誤答の分析  
— 促音、濁音、半濁音に注目して —

#### 4. 分析結果と考察

**表 1. 二字漢語の延べ誤答数と 1 語あたりの平均誤答数**

	出題語数	延べ誤答数	平均誤答数
すべての二字漢語	577	1472	2.55
音変化を含まない二字漢語	532	1308	2.46
音変化を含む二字漢語	45	164	3.64

再生テストの平均点は成績に影響するものであり、なおかつ日本語専攻の4年生ということもあってか、毎回の得点率は90%を超えることがほとんどであった。出題された二字漢語577語に対し、延べ誤答数は1472であり、1語あたりの平均誤答数は2.55であった。そのうち音変化を含まない二字漢語の1語あたりの平均誤答数は2.46であったのに対し、音変化を含むものは3.64となっており、音変化を含む二字漢語の誤答率は含まないものに比べて高くなることが明らかとなった。

##### 4.1 必要な音変化ができていない誤答

\* 括弧内は異なり語数

**表 2. 音変化を含む二字漢語の誤答の傾向**

	音変化を含む 出題語数	音変化を含む延べ 誤答数	音変化が できていない 延べ誤答数	音変化が できていない 誤答の割合	音変化が できていない 平均誤答数
促音化	29	110(73)	34(25)	30.91% (34.25%)	1.17
濁音化	8	16(14)	6(6)	37.5% (42.86%)	0.75
半濁音化	8	38(21)	24(10)	63.16% (47.62%)	3
総計	45	164(108)	64(41)	39.02% (37.96%)	1.42

音変化を含む二字漢語に限定して、その誤答の全体的な傾向を見てみると、音変化を含む二字漢語の誤答164例のうち64例がその音変化が正しくできていないことが要因の誤答であり、誤答全体の39%を占めた。音変化ができていない1語あたりの平均延べ誤答数を比較すると、促音化が1.17、濁音化が0.75、半濁音化が3となっており、このことから二字漢語の音変化の中では半濁音化が広東語母語話者にとって間違いやすいという傾向がこの結果から読み取ることができる。

では促音化、濁音化、半濁音化のそれぞれについて、必要な音変化ができなかった誤答例から、その誤答の傾向と要因を検討していく。

#### 4.1.1 必要な促音化ができていない誤答

表3. 必要な促音化ができていない誤答

語彙	漢字	延べ	異なり	誤答	
あっぱく	圧迫	1	1	あぱつ	
がっしょう	合唱	1	1	がっしょう	
がっち	合致	1	1	がっち	
がっぺい	合併	1	1	がっぺい	
くっせつ	屈折	2	1	くっせつ	けっしよ
けっかく	結核	1	1	けつかく	
けっしょう	結晶	1	1	けっしょう	
げっふ	月賦	1	1	げいふ	
さっかく	錯覚	1	1	さがく	
しっきゃく	失脚	2	1	しきゃく*2	しきゃく
じっせん	実践	3	2	じせん*2	じてん
じったい	実態	1	1	じたい	
せっちゅう	折衷	1	1	せいそう	
ちっそく	窒息	1	1	ちそく	
ちょっけい	直径	3	1	ちょけい*3	
てっこう	鉄鋼	1	1	てっこう	
ひっしゅう	必修	2	1	ひしゅう*2	
ふっこう	復興	2	2	ふきょう	ふへん
ふっとう	沸騰	2	1	ひとう*2	
みっしゅう	密集	2	2	みつしゅう	みしゅう
みつせつ	密接	4	2	みつせつ	みせつ*3

まず必要な促音化ができていなかった誤答について見ていく。促音化ができていなかった誤答を含む二字漢語は「圧迫」、「合唱」、「合致」、「合併」、「屈折」、「結核」、「結晶」、「月賦」、「錯覚」、「失脚」、「実践」、「実態」、「折衷」、「窒息」、「直径」、「鉄鋼」、「必修」、「復興」、「沸騰」、「密集」、「密接」の21語であった。

そこで見られた34の誤答(延べ誤答数)のうち、もっとも多く見られた誤答は促音の欠如で、「実態(×じたい)」や「窒息(×ちそく)」、「直径(×ちょけい)」

広東話話者による二字漢語の誤答の分析  
—促音、濁音、半濁音に注目して—

のような誤答が 22 例見られ、必要な促音化ができていなかった誤答全体の 64.7% を占めた。恐らく 2 つの漢字が結合することによって、前接字末尾音が変化することは認識しており、そのため前接字末尾音の「く」や「つ」を脱落させているのだろう。ただし、それが促音化であると認識していない、あるいは表記の問題でなく、被験者が促音の発音が不得手であるため、促音の存在に気が付かなかったため促音の「っ」が欠如してしまったのではないかと思われる。

次に多く見られたのが「鉄鋼 (×てつこう)」や「密接 (×みつせつ)」のように前接字末尾音が「つ」であり、本来促音化し、「っ」と表記すべきところを、「つ」と書いているものが 7 例見られた。これに関しては被験者が促音化しないと考えて「つ」と書いたのか、それとも促音化させて「っ」と書いたつもりだが、書き癖の問題で「つ」であると判断されたのか、その要因ははっきりしない。例えば、「結晶 (×けつしょう)」のように促音の「っ」だけでなく、拗音の「よ」も「よ」と書いている誤答は書き癖が要因であると推測できるが、「密集 (×みつしゅう)」のような誤答もあり、この場合は「つ」は促音化しないと判断したものと推測できるだろう。ただし、前述の「鉄鋼 (×てつこう)」のような場合、文字からだけではその判別は困難である。

これに類似した誤答で、促音化はしているものの、促音の「っ」の代わりに、「つ」を書いている誤答が見られた。「合唱 (×がつしょう)」「合致 (×がつち)」「合併 (×がつぺい)」の 3 例で、詳しく調べたところ、これらの誤答は 1 名の被験者にのみ見られた傾向で、個人的な書き方の癖で、促音の「っ」を大きく書いてしまう癖があるだけで、本人は促音化をさせているつもりであることが、後日確認できた。よって、この 3 例に関しては表記の問題であり、促音化が要因の誤りではないと思われる。

それ以外には前接字末尾音を促音の「っ」ではなく、「い」に変化させる誤答が「月賦 (×げいぷ)」「折衷 (×せいそう)」の 2 例にのみ見られた。これに関しては、促音化ではなく、長音化させてしまったのかもしれないが、要因はよくわからなかった。

以上から必要な促音化ができていない誤答の要因は主に促音の欠如であることが明らかとなった。

#### 4.1.2 必要な濁音化ができていない誤答

表4. 必要な濁音化ができていない誤答

語彙	漢字	延べ	異なり	誤答
おうごん	黄金	1	1	おうこん
かんじん	肝心	1	1	かんしん
こうずい	洪水	1	1	こうすい
しぼう	脂肪	1	1	しほう
ちんぎん	賃金	1	1	ちんきん
ゆうずう	融通	1	1	ゆうつう

次に必要な濁音化ができていなかった誤答について見ていく。濁音化ができていなかった誤答を含む二字漢語は「黄金」、「洪水」、「脂肪」、「賃金」、「融通」、「肝心」の6語であった。

そこで見られた6の誤答（延べ誤答数）はすべて単純に濁音化ができていないというもので、具体的には「黄金（×おうこん）」、「洪水（×こうすい）」、「脂肪（×しほう）」、「賃金（×ちんきん）」、「融通（×ゆうつう）」、「肝心（×かんしん）」というように二字の漢字をそのまま音変化させずに接続していた。

有声音、無声音が弁別性を持たない広東語母語話者にとって、カ・サ・タ・ハ行の清音、濁音の区別が不得手であることは広く知られており、その影響で清濁を混同してしまった可能性も考えられるが、単純に覚える段階で間違えた、あるいは回答の段階で書き間違えた可能性も否めない。

#### 4.1.3 必要な半濁音化ができていない誤答

表5. 必要な濁音化ができていない誤答

漢字	延べ	異なり	誤答	
圧迫	1	1	あっぱく	
運搬	5	1	うんばん*5	
合併	2	2	かっぺい	がっぺい
月賦	8	2	げっぶ*6	げっぼう*2
神秘	3	1	しんぴ*3	
船舶	2	2	せんぱく	せんぱつ
頻繁	3	1	ひんばん*3	

**広東語話者による二字漢語の誤答の分析**  
**—促音、濁音、半濁音に注目して—**

最後に必要な半濁音化ができていなかった誤答について見ていく。半濁音化ができていなかった誤答を含む二字漢語は「圧迫」、「運搬」、「合併」、「月賦」、「神秘」、「船舶」、「頻繁」の7語であり、そのうち「圧迫」と「月賦」は促音化に伴う半濁音化であり、それ以外は後接字頭音がハ行音の漢字が撥音「ん」の後で半濁音化したものである。

そこで見られた24の誤答（延べ誤答数）は「圧迫（×あっぱく）」や「運搬（×うんばん）」のようにすべて半濁音化ではなく、濁音化をしているというものであり、促音「っ」の後の誤答は延べ語数で11例、撥音「ん」の後では13例見られた。

必要な促音化ができていない誤答では促音の「っ」が脱落した誤答が多かったが、一部には促音化をせず、そのまま二字の漢字を接続しているものも見られた。また必要な濁音化ができていない誤答ではすべて濁音化をせずそのまま二字の漢字を接続していた。それらと比べ、必要な半濁音化ができていなかった誤答には二字の漢字をそのまま接続するという誤答が一つも見られなかったという点で異なっている。これは「二字漢語では後接字頭清音（カ・サ・タ・ハ行音）がすべて濁音化する」という過剰般化が行われているのではないかと推測される。

**4.2 過剰般化による誤答**

**表6. 必要な音変化ができていない誤答と過剰般化をしている誤答の比較**

	過剰般化による 誤答が見られた 出題語数	過剰般化をしている 延べ誤答数 (異なり誤数)	必要な音変化が できていない延べ誤答数 (異なり誤数)
促音化	33	50(38)	34(25)
濁音化	69	133(83)	6(6)
半濁音化	10	15(11)	24(10)
総計	112	198(132)	64(41)

誤答の分析の中で非常に興味深かったのが本来音変化をしないはずの二字漢語まで促音化や濁音化、半濁音化をさせてしまう過剰般化による誤答である。

表6の必要な音変化ができていない誤答数と過剰般化による音変化をしている誤答数を比較したところ、延べ誤答数で約3倍も過剰般化をしている誤答が多いことが明らかとなった。特に過剰般化による誤った濁音化は濁音化が必要なのにそれができなかった誤答に比べ、約22倍も誤りが多く観察され、際立っている。



被験者は日本語専攻の大学4年生であり、これまでの学習経験から「後接字頭清音が濁音化する」という現象を帰納的に習得したものと思われる。しかし今日、濁音化が主に見られるのは和語であり、飛田（1966）などで指摘されているように、二字漢語の濁音化は特に近代以降減少している。鈴木（2016）によると、『日本国語大辞典 第2版』の見出し語に含まれる主な字音形態素の連濁率は0～10%程度であるという。主に和語において見られる濁音化（連濁）という現象を二字漢語において過剰般化させていると思われる。

学習歴の長短などで傾向に違いが見られる可能性はあるが、中上級の漢字圏学習者であれば、おそらく同様の傾向が見られると思われる。以下、過剰般化による促音化、濁音化、半濁音化による誤答についてそれぞれ詳しく見ていく。

#### 4.2.1 促音化の過剰般化による誤答

表7：促音化の過剰般化による誤答

語彙	漢字	延べ	異なり	誤答	
あっぱく	圧迫	1	1	あっぱく	
うんばん	運搬	5	1	うんばん*5	
がっぺい	合併	2	2	かっぺい	がっぺい
げっぶ	月賦	8	2	げっぶ*6	げっぼう*2
しんぴ	神秘	3	1	しんぴ*3	
せんぱく	船舶	2	2	せんぱく	せんぱつ
ひんばん	頻繁	3	1	ひんばん*3	

まず促音化の過剰般化による誤答について見ていく。33語で促音化の過剰般化による誤答が見られた。これら33語のうち「懸賞（けんしょう→×けっしょう）」や「傾斜（けいしゃ→×けっしゃ）」、「視覚（しかく→×しっかく）」のように前接字末尾音が入声音ではないものが21語あった。また33語のうち19語は「閲覧（えつらん→×えっらん）」や「欠如（けつじょ→×けっじょ）」のように後接字頭音がカ・サ・タ・ハ行音ではなかった。33語のうち、前接字、後接字、あるいはその両方が該当するものが30語であり、残りの3語も「楽譜（がくふ）」「確保（かくほ）」「蓄積（ちくせき）」であることから、「前接字末尾音が『（き・）く』の場合、後接字頭音がカ行音のときに促音化する」という法則に該当しない。つまり33語のすべてが促音化の法則に該当しないことが確認できた。促音化の法則は濁音化のそれと比べると例外も少なく、法則を知ることによって促音化の過剰般化による誤りが避けられる可能性は高そうである。

広東話者による二字漢語の誤答の分析  
 一 促音、濁音、半濁音に注目して一

なお「視覚（しかく→×しっかく）」のように前接末尾音の音変化ではなく、母音に促音の「っ」を加えてしまっている例が14語、異なり語数で16例見られた。これは促音化の法則の問題ではなく、促音を含む音とそうでない音の区別がついていないことによる誤答ではないかと思われる。また後接字頭音が濁音である語も「削減（さくげん→×さっげん）」のように14語あったが、これらも被験者が清濁の区別ができていないことに要因があると思われる。つまり過剰般化による誤りを避けるためには促音化の法則を知るだけでなく、変化する以前の漢字の字音を知っていなければならないということを示していると言えよう。

4.2.2 濁音化の過剰般化による誤答

表8. 濁音化の過剰般化による誤答

語彙	漢字	延べ	異なり	誤答		
あっぱく	圧迫	1	1	あっぱく		
いけん	異見	1	1	いげん		
いんかん	印鑑	2	1	いんがん*2		
いんき	陰気	1	1	いんぎ		
うんぱん	運搬	5	1	うんぱん*5		
えんかつ	円滑	2	1	えんがつ*2		
がいとう	街頭	1	1	かいどう		
がいとう	該当	1	1	かいどう		
かくとく	獲得	1	1	かくどく		
がっぺい	合併	2	2	かっぺい	がっぺい	
がんこ	頑固	1	1	かんご		
ききん	基金	1	1	きぎん		
きゅうくつ	窮屈	2	1	きゅうぐう*2		
きょうしゅう	郷愁	4	2	きょうじゅ	きょうじゅう*3	
きょうはく	脅迫	1	1	きょうばく		
きょくたん	極端	3	2	きょくだん*2	きゃくだん	
けいさい	掲載	1	1	けいざい		
けっかく	結核	1	1	けつがく		
けっしょう	結晶	1	1	けっじょう		
げっぷ	月賦	8	2	げっぷ*6	げっぼう*2	
げんてん	原典	1	1	げんでん		

語彙	漢字	延べ	異なり	誤答		
こうきよ	皇居	1	1	こうぎよ		
ごく	語句	3	2	こぐ*2	ごく	
さっかく	錯覚	4	2	さっがく*3	さがく	
ざひょう	座標	1	1	さびょう		
ざんこく	残酷	1	1	ざんごく		
しかく	視覚	2	1	しがく*2		
しき	指揮	1	1	しぎ		
じき	磁器	1	1	しぎ		
じき	磁気	1	1	しぎ		
じこ	自己	6	3	じご*4	じごう	しご
じっせん	実践	3	2	じっぜん*2	しっぜん	
しゅうし	修士	1	1	しゅうじ		
しゅし	趣旨	1	1	しゅうじ		
じょうし	上司	1	1	じょうじ		
じょうほ	譲歩	3	3	じょうぼ	しょうぼ	じょうぼう
しんぴ	神秘	3	1	しんぴ*3		
せいさい	制裁	1	1	せいざい		
ぜせい	是正	1	1	せぜい		
せんさい	戦災	1	1	せんざい		
せんとう	戦闘	2	1	せんどう*2		
せんぱく	船舶	2	2	せんぱく	せんぱつ	
だいたん	大胆	4	2	*2 たいだん	だいだん	
だけつ	妥結	3	2	だけつ*2	だけき	
たんか	担架	1	1	たんが		
ちょうかく	聴覚	2	1	ちょうがく*2		
ちょっけい	直径	1	1	ちょっけい		
てっこう	鉄鋼	1	1	てっこう		
てんさい	天災	3	1	てんざい*3		
とうち	統治	4	1	とうじ*4		
ないかく	内閣	5	1	ないがく*5		

広東話者による二字漢語の誤答の分析  
 一 促音、濁音、半濁音に注目して一

語彙	漢字	延べ	異なり	誤答		
ねんかん	年鑑	1	1	ねんがん		
はかい	破壊	2	1	はがい*2		
はんしゃ	反射	1	1	はんじゃ		
びんかん	敏感	1	1	ひんがん		
ひんぱん	頻繁	3	1	ひんぱん*3		
ふっこう	復興	1	1	ふつごう		
ふつとう	沸騰	1	1	ふつどく		
ふはい	腐敗	1	1	ふうばい		
ふひょう	不評	1	1	ふびょう		
ふんとう	奮闘	1	1	ふんどう		
べんかい	弁解	1	1	べんがい		
へんかん	返還	2	1	へんがん*2		
ぼうちょう	膨張	1	1	ぼうじょう		
ぼうとう	冒頭	1	1	ぼうどう		
ほかく	捕獲	2	1	ほかく*2		
ほけん	保険	1	1	ほげん		
ほしょう	補償	1	1	ぼじゅう		
もほう	模倣	6	1	もぼう*6		

次に濁音化の過剰般化による誤答について見ていく。69語で濁音化の過剰般化による誤答が見られた。これら69語のうち「意見(いけん)」や「極端(きよくたん)」のように前接字末尾音が広東語でm,n,ng音ではないものが41語あった。また69語のうち7語は3.1.3 必要な半濁音化ができていない誤答で観察された本来、後接字頭音が半濁音化すべきところを濁音化させている誤りであり、うち「運搬(うんぱん)」、「神秘(しんぴ)」、「船舶(せんぱく)」の4語は原則として前接字末尾音が「ん」の場合、後接字頭音がハ行音の漢字は濁音化ではなく、半濁音化するという法則を知ることと比較的容易に避けられたように思われる。前接字末尾音が広東語でm,n,ng音ではない41語と撥音「ん」の後ろで半濁音化すべき4語を合わせた45語は濁音化の過剰般化による誤答の65.2%を占める。促音化の過剰般化による誤答比べると、法則により誤りが避けられる割合はやや低い、これは現代日本語の字音語においては連濁をしない新しい語が多く、例外が多いため、濁音化の法則からだけでは発音の判別がつきにくいことに起因していると思われる。

#### 4.2.3 半濁音化の過剰般化による誤答

表9. 半濁音化の過剰般化による誤答

語彙	漢字	延べ	異なり	誤答	
おうぼ	応募	3	1	おうぼ*3	
かいぼう	解剖	1	1	かいぼう	
けいぼつ	刑罰	1	1	げっぼつ	
けつぼう	欠乏	2	2	けつぼう	けつぷ
こうふん	興奮	1	1	こうふ	
こうぼ	公募	1	1	こうぼう	
そくぱく	束縛	1	1	そくぱく	
そぼく	素朴	3	1	そぼく*3	
ちんぼつ	沈没	1	1	ちんぼつ	
びんぼう	貧乏	1	1	びんぼん	

最後に半濁音化の過剰般化による誤答について見ていく。10語で半濁音化の過剰般化による誤答が見られた。これら10語のうち6語は「応募（おうぼ）」、「解剖（かいぼう）」、「刑罰（けいぼつ）」、「興奮（こうふん）」、「公募（こうぼ）」、「素朴（そぼく）」であり、前接字末尾音が入声音や撥音「ん」ではなかった。また10語のうち「興奮」の「奮（ふん）」を除く9語は後接字頭音が半濁音化をする必要条件であるハ行音ではなく、バ行音であった。つまりこの二点から10語すべてが半濁音化の法則に合致しないことが明らかであり、例外も少ないことから、促音化と同様に半濁音化に関しても法則を知ることによって過剰般化による誤りが避けられる可能性は高そうである。

#### 5. まとめ

今回の研究結果から、まず音変化（促音化、濁音化、半濁音化）を含む二字漢語は音変化を含まないものに比べて誤答率が高く、また音変化ができていない誤答は半濁音化に関するものが他より多く見られるということも明らかとなった。さらに音変化が正しくできていない誤答よりも、むしろ本来音変化をすべきではないものを過剰般化によって音変化をさせてしまう誤答のほうが多く観察され、広東語母語話者の二字漢語の学習の際には過剰般化による音変化の誤り、特に濁音化に関して注意が必要であることも明らかとなった。

**広東語話者による二字漢語の誤答の分析**  
**—促音、濁音、半濁音に注目して—**

今後は初中級レベルで扱われる二字漢語などにも調査対象の範囲を広げ、また被験者も広東語母語話者だけでなく、入声音がない北京語母語話者との比較も試みたい。さらに本研究で明らかとなった二字漢語の音変化に関する誤答、特に過剰般化による誤答を事前に音変化の法則を導入することにより、誤答が減らせるかどうかという実践研究も行ってみたい。

**参考文献**

- 阿久津智（1991）「漢字圏の学生に対する漢字教育について」『筑波大学留学生教育センター日本語教育論集』6,129-144.
- 伊藤芳照（1989）「漢字の音訓」武部良明（編）『講座日本語と日本語教育 8 日本語の文字・表記（上）』明治書院, 125-158.
- 黒沢晶子（2013）「漢字音教材開発—入声音を含む漢語の音変化をどう扱うか—」『日本語教育方法研究会誌』20-1,62-63.
- 国際交流基金・日本国際教育協会（2002）『日本語能力試験出題基準【改訂版】』凡人社
- 兒島慶治（1998）「香港広東語話者への漢字の読み教育について—香港中文大学日本研究学科の自作教材の分析を通して—」『日本学刊』2,1-28.
- 鈴木豊（2016）「字音形態素「ショ（所）」の連濁—「研究所」「保育所」を中心に—」『文京大学外国語学部紀要』15,1-14
- 濱田美和・高島智美（2009）「中国人学習者に対する漢字教育のための基礎研究—漢字の読み・書きクイズにおける誤答の分析—」, 『富山大学留学生センター紀要』, 8,1-12.
- 飛田良文（1966）「明治大正時代における漢語の連濁現象」『東北大学日本文化研究所研究報告』2,251-266.